

感覚質の欠如と逆転は可能か

信原 幸弘

心的状態はそれぞれある特有の機能をもっているように思われる。痛みは、足で踏まれるとか針で刺されるなどの刺激によって引き起こされ、私は痛いという信念や痛みを緩和したいという欲求などの他の心的状態を生じ、また「私は痛い」という言語行動や、顔を歪めるとか患部をさするなどの非言語的行動を生じる。このように痛みは、刺激入力や他の心的状態、行動出力にたいしてある一定の因果的役割ないし機能をもっている。心的状態をこの種の機能によって定義しようとする立場は、機能主義とよばれる。

機能主義のもとでは、痛みはそれのもつ機能によって定義されることになるが、本来的に言えば、痛みとは痛く感じる状態、つまり、痛いという感覚質によって定義される状態のことである。ある心的状態が痛みであるかどうかは、それがいかなる機能をもつかということよりも、それが痛みの感覚質をもつかどうかによって決まる。そして機能と感覚質はまったく別種のものであるから、同じ機能をもつからといって同じ感覚質をもつとはかぎらないし、また逆に、同じ感覚質をもつからといって同じ機能をもつとはかぎらない。あるいは、少なくともそのように思われる。とすれば、痛みのように感覚質によって定義される状態、つまり質的状态 (qualitative state) にとって、その機能はその本質的特徴ではなく、たんなる偶然的特徴にすぎないということになる。

機能と感覚質のあいだに本質的な連関がないようにみえるところから、感覚質の欠如 (absent qualia) および感覚質の逆転 (inverted qualia) が可能であるように思えてくる。たとえば、痛みと同じ機能をもつ状態がそれにもかかわらず感覚質をいっさい欠くということが可能であるように思われるし、また痛みと同じ機能をもつ状態が痒みの感覚質をもち、逆に痒みと同じ機能をもつ状態が痛みの感覚質をもつということも可能であるように思われる。感覚質欠如の可能性は、感覚質をもつ状態とまたない状態が同じ機能をもちうることを示している。また感覚質逆転の可能性は、異なる感覚質をもつ状態が同じ機能をもちうることを示している。したがって、感覚質の逆転には、異なる感覚質をもつふたつの状態が置き換わっているケースだけでなく、もっと多くの種類の質的状态 (たとえば色彩スペクトル) が体系的に置き換わっているケースや、さらにわれわれの知らない感覚質をもつ状態がわれわれの質的状态と同じ機能をもつケース (たとえばコウモリの知覚状態) も含まれると考えてよい。

感覚質の欠如や逆転が可能だとすれば、それは機能主義にとって致命的な障害となろう。なぜなら、少なくとも、感覚質によって定義される状態、つまり質的状态については、機能的定義が不可能だということになるからである。したがって、機能主義の立場を維持しようと思えば、感覚質の欠如および逆転がともに不可能であることを示さなければなら

いように思われる。ところが、興味深いことに、シューメーカーは機能主義の擁護を目指しながら、感覚質欠如の可能性は否定するものの、感覚質逆転の可能性は容認する。前者さえ否定できれば、後者を容認しても、機能主義にとって重大な障害とはならないと考えるからである⁽¹⁾。

だが、感覚質の欠如と逆転はいわば運命を共にしているように思われる。一方が可能であるのに、他方が不可能だということはないように思われる。なぜなら、感覚質と機能のあいだに本質的な連関がなければ、感覚質の欠如も逆転も可能であるし、そのような連関があれば、いずれも不可能であるようにみえるからである。

本稿ではまず、感覚質欠如の不可能性を示すシューメーカーの議論を概観し、それにたいするブロックの反論およびコーニの反論を吟味し、いずれも反論として不成功であることを示す。続いて、しかし、このような仕方では感覚質欠如の不可能性が論証できるなら、同じような仕方では感覚質逆転の不可能性も論証できることを示す。しかし、感覚質の欠如と逆転の不可能性はわれわれの直観に反するよう思われる。そこで、最後に、感覚質の欠如と逆転が可能だとわれわれに思わせているのは、感覚質についてのわれわれのどのような理解なのかを明らかにしたいと思う。

1 シューメーカーの感覚質欠如不可能論

シューメーカーが感覚質欠如の可能性を否定するのは、ほぼつぎのような理由による⁽²⁾。われわれは自分の痛みがある感覚質をもつことを知っていると思っている。おそらく、それはわれわれの知識のなかでもっとも明白で確かな知識のひとつであろう。ところが、感覚質の欠如が可能だとすれば、痛みと同じ機能をもちながら感覚質を欠く状態、いわば疑似痛みが可能だということになる。疑似痛みは真正痛み（感覚質を有する本来の痛み）と同じ機能をもつから、それと同じ原因によって生じ、同じ結果を引き起こすであろう。たとえば、疑似痛みも、自分は痛いという信念や、「自分は痛い」という発話を引き起こすであろう。それゆえ、疑似痛みを真正痛みから区別することはできなくなろう。疑似痛みをもつ人も真正痛みをもつ人とまったく同等の権利で、自分の痛みは真正だと主張できる。そうすると、自分の痛みが真正痛みなのかどうかを知ることはできないということになってしまう。それゆえ、感覚質の欠如は不可能だというわけである。

このシューメーカーの論証は、ほぼつぎのように整理できる⁽³⁾。

前提1（感覚質欠如の仮説） 感覚質欠如が可能ならば、真正痛みと疑似痛みは互いの区別を可能にするような因果的差異を生じないであろう。

前提2（知識の因果説） ある性質をもつ状態とそれをもたない状態が互いの区別を可能にするような因果的差異を生じないなら、その性質は不可知となろう。

前提3（感覚質の可知性） 感覚質は可知的である。

結論 感覚質欠如は不可能である。

2 ブロックの反論

シューメーカーの論証にたいして、ブロックはとくに前提1を問題にする⁽⁴⁾。かれによれば、真正痛みと疑似痛みが同じ機能をもつからといって、それらはすべての因果的特徴を共有するわけではない。痛みの機能に関与するのは、痛みの全因果的特徴のうちのある一部分だけである。つまり、痛みの機能はあらゆる痛みのケースに共通の因果的特徴のことであり、個々のケースは機能に属するもの以外の因果的特徴をも有し、その点で互いに異なりうる（これは機能主義の中心的論点のひとつである多重実現関係、すなわち同じ機能が異なる物理的性質によって実現可能であるという点から帰結することである）。そうすると、真正痛みと疑似痛みはこの機能以外の因果的特徴において互いの区別を可能にするような差異を生じうるかもしれない。たとえば、痛みの感覚質がある生理学的性質と同定されうるとすれば（じっさいブロックは感覚質にかんしてはこの心脳同一説的な考えに共感を示している）、この生理学的性質によって実現されるような痛みの機能をもつ状態は感覚質をもつが、それとは別の生理学的性質によって実現されるような痛みの機能をもつ状態は感覚質をもたないことになる。そして両者は実現性質が異なるから、当然、両者の区別を可能にするような因果的差異を生じると考えられる。このようにして、前提1は必ずしも成り立つとはかぎらないのである。

このブロックの反論にたいして、シューメーカー自身は「痛み」という語の意味論的性質の考察から、痛みの感覚質が何らかの生理学的性質と同定されることはありえないとして、自説を擁護している⁽⁵⁾。が、それは上述の感覚質の可知性に基づく認識論的論証とは別の論証になるので、ここでは触れないことにして、上述の認識論的論証の枠内でブロックの反論に対処できるかどうかを考えてみよう。ブロックによれば、真正痛みと疑似痛みはそれらを実現する生理学的性質の違いによって、脳波検査や頭部レントゲン撮影などにたいして異なる結果を生じるとされる⁽⁶⁾。そしてこのような因果的差異からある状態を実現する生理学的性質が同定され、それによってその状態が真正痛みかどうか知られるのである。だが、それでは、ある状態が真正痛みであるかどうかを三人称的に知ることはできても、一人称的に、つまり内観によって知ることはできなくなる。われわれは自分の痛みが真正痛みかどうかを内観的に知りうると考えている。そして内観的に知るときには、その痛みを実現している物理的性質のことなどはまったく何も知らないのである。したがって、内観的な知を問題にすれば、ブロックの反論を退けることができよう。じっさい、シューメーカー自身、感覚質が可知的だと言うとき、そこに内観的な知の可能性も含めている⁽⁷⁾。そこで、上述の論証をつぎのように書き換えることにより、ブロックの反論は回避できるように思われる。

前提A（感覚質欠如の仮説） 感覚質欠如が可能ならば、真正痛みと疑似痛みは互いの区別を内観的に可能にするような因果的差異を生じないであろう。

前提B（知識の因果説） ある性質をもつ状態とそれをもたない状態が互いの区別を

内観的に可能にするような因果的差異を生じないなら、その性質は内観的には不可知となろう。

前提C（感覚質の可知性） 感覚質は内観的に可知的である。

結論 感覚質欠如は不可能である。

3 コーニーの反論

このようなシューメーカーの論証の内観版にたいしても、やはり前提Aをめぐる新たな反論が提起される。すなわち、コーニーによれば、真正痛みと疑似痛みをそれらの因果的差異によって内観的に区別することが可能である。その理由はおおよそ以下のとおりである⁽⁸⁾。まず真正痛みをもつ人がその痛みを内観すれば、それが痛みの感覚質を提示しているという信念をもつであろう。それにたいして、疑似痛みをもつ人がその「痛み」を内観すると、それが<感覚質を探しても見つからない>という現象的性質（これは一種の感覚質とされているが、それにしても何という奇妙な感覚質であることか！）を提示しているという信念をもつであろう。真正痛みと疑似痛みが同じ機能をもつにもかかわらず、このような因果的差異が生じると考えられるのは、このふたつの信念がともに、そこに含まれる感覚質によって本質的に特徴づけられるような状態であるため、痛みのような質的状态の機能的定義には使えないと考えられるからである。なぜなら、そのような質的信念を用いて質的状态が機能的に定義できたとしても、その質的信念のほうが機能的に定義できなければ、感覚質が機能主義の脅威となることはないということが示されないからである。つまり、問題がたんに質的状态から質的信念に移されるだけだからである。そこで質的信念が質的状态の機能的定義に使えないとすれば、質的信念は質的状态の機能に参与しないから、同じ機能をもつ質的状态が異なる質的信念を生じることが可能になるわけである。こうして、真正痛みと疑似痛みは内観により異なる質的信念を生じることにより、内観的に区別可能ということになるのである。

だが、この質的信念とはいったいどのようなものであろうか。コーニーは、疑似痛みをもつ人はある異常な心理状態にあると言う⁽⁹⁾。そのような人は、反省的には、その「痛み」が真正痛みであり、感覚質をもつと信じている。なぜなら、このような非質的信念は痛みの機能に参与すると考えられるからである。ところが、他方では、かれはその「痛み」が「感覚質を探しても見つからない」という感覚質を提示していると信じ、それに基づいてそれが疑似痛みだと信じている。したがって、かれは矛盾した信念を抱いているのである。だが、コーニーはこの程度の異常さは可知的な疑似痛みの想定を不可能にするような異常さではなく、したがって感覚質欠如の可能性を妨げはしないと主張する⁽¹⁰⁾。だが、疑似痛みをもつ人は本当にそのような矛盾した信念を抱いているのであろうか。かれは質的信念に基づいて、かれの「痛み」が疑似的だと信じるとされるが、この信念は質的なのだろうか、それとも非質的なのだろうか。質的だとすれば、それはその根拠となった質的

信念とどう違うのか。また質的な信念はいかにして非質的な信念と矛盾しうるのか。一方は感覚的表象に基づく信念であり、他方は言語的表象に基づく信念である。周知のように、言明は観察と直接矛盾するのではなく、観察に由来する言明を通じて矛盾する。つまり、言明と直接矛盾しうるのは観察ではなく、観察言明である。同じことが質的な信念と非質的な信念のあいだにも言えるのではないかとすれば、自分の痛みは疑似的だという信念は非質的な信念だと考えるほうがもっともらしいように思われる。しかし、そうすると、それは痛みの機能に関与することになるのではないかと。それが痛みの機能に関与してはならないという理由はないように思われる。とすれば、疑似痛みがそのような信念を生じることがありえないことになってしまう。

このような奇妙な痛結を回避するには、疑似痛みの場合も、質的信念にもとづいて真正痛みの場合と同じ信念、すなわちこの状態は真正痛みであるという信念が生ずるとするしかないように思われる。しかし、そうすると、そのような信念は信頼性を欠くことになり、知識の名に値しないであろう。したがって、非質的な信念という形では、痛みの感覚質にかんする知識をもつことはできないということになる。そこで、残された唯一の道は、質的信念をもつことが感覚質を知ることにはほかならないと考えることであろう。だが、この質的信念とはどのようなものであろうか。

シューメーカーも質的信念を問題にする。かれの場合、質的信念とはある状態をある一定の感覚質をもつものとして内観的に感知することにほかならない⁽¹¹⁾。痛みの場合で言えば、それは要するに、痛く感じるという意識状態のことにほかならない。コーニーはこれほどはっきりとは断言していないが、感覚質を意識している場合にのみ質的信念をもちうると述べており⁽¹²⁾、基本的にはシューメーカーと同じ考えと見てよい。ところが、シューメーカーとコーニーは質的信念を同じようなものとして捉えながら、真正痛みと疑似痛みが同じ質的信念を生じるかどうかにかんして意見を異にする。すでに見たように、コーニーは真正痛みと疑似痛みが異なる質的信念を生じると考えているのにたいし、シューメーカーは両者が同じ質的信念を生じると考えているようである。というのも、かれは質的信念も機能に関与すると見ているからである。この点が、感覚質欠如の可能性をめぐる両者の意見が分かれる根本的な原因である。

質的信念を同じように捉えながら、真正痛みと疑似痛みが同じ質的信念を生じるかどうかにかんして意見が分かれてしまうのは、どうしてであろうか。それは、質的信念にたいして相反する二重の役割が課せられているからではないかと思われる。いま、わたしの歯が痛いとしよう。このとき、わたしは歯に痛みを感じている。つまり、わたしはその痛みをある一定の感覚質をもつものとして意識している。だが、このような意識とは別に何か痛みなるもの、いわば痛みそれ自体があるわけではない。つまり、痛みの意識はけっして痛みとは別の心的状態ではないのである。痛みの意識が質的だといえるものそれゆえである。ところが、その一方で、痛みの意識が痛みとは別の状態、痛みについての意識と考えられる場合がある。それは、痛く感じているときに、その痛く感じていることをあらため

て意識するような場合である。つまり、自分は痛く感じていると反省的に思う場合である。このような場合には、たしかに痛みと痛みの意識とは別の心的状態であろう。しかし、このような場合の意識は、痛みをもう一度痛み直すといったようなことではない。自分は痛く感じているとあらためて思うとき、それは自分の痛みを複製してもう一度痛むというようなことではない。それはそれ自体としては、痛くも痒くもない。つまり非質的な状態である。きのう歯が痛く感じたことを思い出すときに少しも痛くないのと同様、いま痛く感じているという思いもそれ自身はいかなる感覚質ももたない。それは痛みについての非質的な状態である。このように、痛みの意識と言っても、そこにはふたつの意味がある。ひとつの意味では、痛みの意識は痛みそのものであり、それゆえ質的である。もうひとつの意味では、それは痛みによって引き起こされ、痛みとは別の非質的な状態である。質的信念には、痛みの意識のこのふたつの意味に対応して、質的であると同時に、痛みの因果的結果でもあるという二重の役割が課せられているのである。質的であるという点に注目すれば、真正痛みと疑似痛みは異なる質的信念を生じるという考えに傾くであろうし、因果的結果であるという点に注目すれば、同じ質的信念を生じるという考えに傾くであろう。だが、質的信念にこの両方の役割を担わせるわけにはゆかないのである。

結局、痛みにかんする内観的信念として認めることができるのは、言語的表象に基づく非質的な信念のみである。感覚質を本質的に含む質的「信念」はじつは痛みそのものにはかならず、それはそもそも痛みについての信念ではない。したがって、コーニーが主張するように、真正痛みと疑似痛みが異なる「質的信念」を生じるというようなことはありえないのである。こうしてコーニーの反論も退けられるのである。

4 感覚質逆転の不可能性を示す認識論的論証

感覚質の内観的可知性に基づく感覚質欠如の不可能性の論証は、結局のところ、真正痛みと疑似痛みがともに、これは痛みだという同じ内観的信念を生じるため、両者の内観的区別が不可能になってしまうというものであった。しかし、このようにして感覚質欠如の不可能性が論証できるなら、同じようにして感覚質逆転の不可能性も論証できるように思われる。

われわれは歯が痛いとき、その痛みが何かある感覚質をもつということだけではなく、痛みの定義的特徴であるような感覚質をもつということも内観的に知っていると思っている。つまり、われわれはその状態が真正痛みなのか、それとも疑似痛みなのかを内観的に区別できるだけではなく、それが痛みの感覚質をもつのか、それとも痒みやくすぐったさなどの感覚質をもつのかも内観的に区別できると考えている。しかも、ある状態が何かある感覚質をもつことが内観的に知られるのは、それがある特定の感覚質をもつことが内観的に知られることによってである。つまり、どの感覚質をもつかは分からないが、ともかく何かある感覚質をもつことが内観的に知られるというようなことはない⁽¹³⁾。したがっ

て、感覚質の内観的可知性とは、第一義的には、個々の特定の感覚質にかんする内観的可知性なのである。

個々の感覚質にかんして内観的可知性が認められるなら、それに基づいて感覚質逆転の不可能性が論証できるように思われる。いま、感覚質の逆転が可能だとすると、たとえば、痛みの機能をもちながら、痒みの感覚質をもつような状態が可能だということになる。これを逆転痛みとよぶことにして、本来の痛み、すなわち痛みの機能と感覚質をもつ状態をこれまでと同じく真正痛みとよぶことにしよう。そうすると、前述の感覚質欠如の不可能性の論証にならって、つぎのような認識論的論証が感覚質逆転の不可能性にかんして構成できよう。

前提 a (感覚質逆転の仮説) 感覚質逆転が可能なら、真正痛みと逆転痛みは互いの区別を内観的に可能にするような因果的差異を生じないであろう。

前提 b (知識の因果説) 異なる性質をもつ状態が互いの区別を内観的に可能にするような因果的差異を生じないなら、それらの性質は内観的には不可知となろう。

前提 c (感覚質の可知性) 個々の感覚質は内観的に可知的である。

結論 感覚質逆転は不可能である。

この論証の要点もまた、真正痛みと逆転痛みがともに、これは痛みだという同じ内観的信念を生じるため、両者の内観的区別が不可能になってしまうという点にある。いま、痛みと痒みがわれわれの場合とは入れ替わった人を考えてみよう。この逆転人は、われわれ真正人が痛みを感じる時に痒みを感じるが、それにもかかわらずわれわれと同じく、自分は痛いという内観的信念をもつ。したがって、内観的には、自分のある状態が本当に痛みの感覚質をもつのか、それとも実は痒みの感覚質をもつのかを知ることにはできないということになる。

この論証にたいして、あるいはつぎのような反論が提起されるかもしれない。感覚質の逆転が可能だとすれば、たしかに、同じ機能をもつ状態が異なる感覚質をもちうるから、異なる人のあいだで同じ機能をもつ状態が同じ感覚質をもつとはかぎらない。しかし、同一人物のなかでは、同じ機能をもつ状態は同じ感覚質をもつであろう。逆転人においては、痛みの機能をもつ状態が痒みの感覚質をもつが、それでもその状態は痛みの機能をもつかぎり、痒みの感覚質をもつであろう。機能はそのまま、感覚質だけが変化するようなことはない。感覚質が変化すれば、機能もそれに伴って変化する。たとえば、ある真正人が、それまで痛みを感じていた刺激にたいして痒みを感じるようになったとしよう。そのとき、この状態は痛みの感覚質から痒みのそれへと感覚質を変えただけではなく、その機能も変える。なぜなら、その人は自分は痛いと思うのではなく、痒いと思うだろうし、また痒いところをさすのではなく、ひっかくであろうからである。むろん、かれがこの変化に順応して、痒いにもかかわらず、痛いと思うとか、痒いところをさすとかするようになれば、この状態は痒みの感覚質をもったまま痛みの機能をもつことになろう。しかし、このような過程を経ず、いきなり、この状態が感覚質だけを変えることはあるまい。もしその

ような変化が起これば、それは当人にとってすら気づかれないであろう。つまり、それは探知不可能な変化ということになる。したがって、そのような変化を想定することは無意味ではないかと思われよう⁽⁴⁾。こうして、同一人物のなかでは、順応のような過程を経ないかぎり、同じ機能をもつ状態は同じ感覚質をもつことになる。

そうすると、同一人物のなかでは、異なる感覚質をもつ状態には、異なる内観的信念が対応することになる。とすれば、逆転人のように、痒みの感覚質をもつ状態にたいして、これは痛みだという内観的信念が生じ、逆に痛みの感覚質をもつ状態にたいして、これは痒みだという内観的信念が生じたとしても、感覚質と内観的信念が一対一に対応しているかぎり、同一人物の内部では内観的に感覚質の区別ができていえるのではなかろうか。これは言い換えれば、真正人と逆転人はともに同じ言語的表象に基づいて、これは痛みだという内観的信念をもつにもかかわらず、両者においてこの信念の内容は異なっており、つまり真正人の場合はこれは痛みだという内容であるのにたいし、逆転人の場合はこれは痒みだという内容であり、したがって両者の信念はともに正しく、両者とも自分の状態がどの感覚質をもつかを内観的に知っていると言えるのではないかということである。そうだとすれば、感覚質の逆転が可能だとしても、それは異なる人のあいだでの感覚質の異同が不可知になるだけのことで、同一人物の内部では、個々の感覚質の内観的可知性は保たれているように思われるのである。

しかし、このような反論が可能だとすれば、感覚質欠如の不可能性にかんする認識論的論証にたいしても同様の反論が可能となる。感覚質の欠如が可能なら、われわれ真正人と同じ機能的組織をもちながら、どの心的状態もまったく感覚質を欠くような人がありうることになる。このような人を疑似人とよぶことにしよう。真正人の質的状态と同じ機能をもつ疑似人の疑似質的状态は、真正人の質的状态が<感覚質をもつ>という類的性質を共有するのと同様に、ある類的性質を共有するかもしれない。それを疑似感覚質とよぶことにしよう。疑似人の場合、ある疑似質的状态にたいして、これは感覚質をもつという内観的信念が生じる。したがって、真正人と疑似人とでは、感覚質の有無にかんして異なる状態が、それにもかかわらず、これは感覚質をもつという同じ内観的信念を生じる。しかし、同一人物の内部では、そのようなことはない。すなわち、真正人においては、感覚質をもつ状態はそれが感覚質をもつという内観的信念を生じ、感覚質をもたない状態はそれが感覚質を欠くという内観的信念を生じる。また疑似人においては、疑似感覚質をもつ状態はそれが感覚質をもつという内観的信念を生じ、疑似感覚質をもたない状態はそれが感覚質を欠くという内観的信念を生じる。したがって、真正人と疑似人の内観的信念はともに同じ言語的表象に基づくにもかかわらず、異なる内容を、すなわち真正人の場合は問題の状態が感覚質をもつ（もたない）という内容を、疑似人の場合はそれが疑似感覚質をもつ（もたない）という内容を有すると考えられ、それゆえ両者の信念は正しく、真正人は自分の心的状態が感覚質をもつかどうかを内観的に知りうるということになる（疑似人のほうは、自分の心的状態が疑似感覚質をもつかどうかを内観的に知りうるということになる）。

このような反論にたいしては、しかし、真正人と逆転人、あるいは真正人と疑似人のあいだで、双方の内観的信念の内容が異なるという点に疑問が向けられるかもしれない。両者の信念は同じ言語的表象に基づくから、同じ機能をもち、したがって、同じ内容をもつはずだと思われるからである。しかし、信念の内容帰属にかんする問題は非常に複雑微妙であるため、ここでそれに触れる余裕はない⁽¹⁵⁾。それゆえ、上述の反論が有効かどうかという点についても、今後の課題とせざるをえない。ここでは、感覚質逆転の不可能性が批判されるなら、同じようにして感覚質欠如の不可能性も批判されるという点を確認しておけば、十分である。その点さえ確認できれば、シューメーカーの立場が維持しがたいこと、したがって感覚質の欠如と逆転は運命を共にすることが示されるからである。

5 感覚質の欠如と逆転を可能と思わせるわれわれの感覚質概念

感覚質の欠如および逆転の不可能性を示す認識論的論証と、そのような論証にたいする可能な反論について吟味してきたが、われわれの直観から言えば、感覚質は機能から独立であり、したがって感覚質の欠如と逆転はともに可能であるように思われる。このような直観の背後には、われわれのどのような感覚質理解が働いているのであろうか。最後に、この点を考察して、われわれの感覚質概念の一端を明らかにしてみたい。

感覚質の欠如と逆転の不可能性を示す認識論的論証においては、真正痛みと疑似痛み、あるいは真正痛みと逆転痛みが同じ内観的信念を生じるため、そのような信念は知識たりえないというのが、論証の核心であった。またこの論証にたいする反論においては、真正人と疑似人、あるいは真正人と逆転人のあいだでは、そのような内観的信念が同じ言語的表象に基づくにもかかわらず異なる内容をもつと考えられ、したがって知識たりうるというのが、中心的な論点であった。ここから明らかのように、両者は感覚質についての内観的信念が知識たりうるかどうかをめぐる対立しているわけである。だが、このことは言い換えれば、感覚質についての内観的知識が成立しうるとすれば、それはそのような内観的信念の形で成立すると考える点では、両者は共通だということである。

しかし、さきに質的信念を吟味したときに確認したように、感覚質についての内観的知識にはもうひとつの意味が認められる。わたしが痛みの状態にあるとき、わたしは痛みを感じる。痛みを感じないのに痛いというようなことはありえない。痛みはそれ自体としてすでに痛みの意識であり、痛みの内観的感知である。この意味で、痛みはそれ自身についての内観的知識であると言える。この意味での知識は、痛みとは別の、痛みについての志向的状态ではなく、痛みそのものである。それはいわば通常の対自的な知識と対比される即自的な知識である。

感覚質についてのこのような即自的な知識は、感覚質をもつ状態がどのような機能をもつかということとは無関係に成立するように思われる。わたしが痛く感じる時、わたしはその痛みがどのような機能をもつかということを考慮して、痛く感じるわけではない。そ

のような考慮抜きに、端的に痛みを感じる。また、わたしが痛く感じるのは、その痛みの因果的帰結として痛く感じるのではない。痛みそのものが痛く感じることなのである。こうして、わたしが痛みを感じる時、痛みの機能とは無関係に、痛みを感じるように思われるのである。むしろ、このことは、痛みについての即自的知識と痛みの機能のあいだに何か別の隠れた本質的連関がありうることを決定的に否定しざるものではない。しかし、少なくとも表面的にはそのような連関があるようには思えないのである。

感覚質についての即自的知識がその感覚質をもつ状態の機能とは無関係に成立するとすれば、即自的知識によってある一定の感覚質をもつものとして同定された状態がどのような機能をもつかは、まったく偶然的なことがらということになる。即自的知識によって痛みとして同定された状態は、そのもつ機能とは無関係に、ただ痛く感じるがゆえに痛みとして同定されたのであるから、可能的にはどのような機能をももちうるということになる。つまり、即自的知識と機能のあいだに本質的な連関がなければ、当然、感覚質と機能のあいだにも本質的な連関はないわけである。

感覚質と機能が独立だということになれば、同じ機能をもつ状態が同じ感覚質をもつとはかぎらないから、感覚質の逆転が可能ということになる。また同じ機能をもつ状態が感覚質の有無を同じくするとともかぎらないから、感覚質の欠如も可能ということになる。

感覚質の欠如と逆転が可能だとわれわれが直観的に思うのは、感覚質にかんしては即自的知識という特異な知識が成立しているとわれわれが考えているからであるように思われる。しかし、このことは、そのような知識が本当に存在するか、したがって本当に感覚質の欠如や逆転が可能であるとかいうことではない。それはただ、われわれの直観の背後にあるものを分析してみただけのことである。感覚質にかんする即自的知識が本当に存在するのか、それは本当に機能から独立なのか、したがってまた、感覚質の欠如と逆転は本当に可能なのかは、今後に残された課題である。本稿では、感覚質欠如の可能性と感覚質逆転の可能性が運命を共にすること、および感覚質の欠如と逆転がともに可能だというわれわれの直観の背後には感覚質をもつ状態が同時にまた即自的知識でもあるという特異な感覚質概念があること、この二点を確認したことで満足することにしたい。

【注】

(1) 機能主義と感覚質の問題をめぐるシューメーカーの見解については、Sydney Shoemaker, "Phenomenal Similarity," *Critica*, 7, 20 (1975); "Functionalism and Qualia," *Philosophical Studies*, 27(1975); "Absent Qualia Are Impossible," *The Philosophical Review*, 90, 4(1981); "The Inverted Spectrum," *The Journal of Philosophy*, 74.7 (1981)を参照。これらはいずれもSydney Shoemaker, *Identity, Cause, and Mind*, Cambridge University Press, 1984に収録されており、以下の引用はこの論文集 (ICMと略記) による。

(2) ICM, pp. 187-92.

(3) この定式化については、シューメーカーの感覚質欠如不可能論の批判を意図した Ned Block, "Are Absent Qualia Impossible?," *The Philosophical Review*, 89, 2(1980), pp. 259, 264 および Earl Conee, "The Possibility of Absent Qualia," *The Philosophical Review*, 94, 3(1985), pp. 350-51を参照。なおシューメーカーはブロックの定式化を一部変更して受け入れている (ICM, p. 316)。

(4) Block, *op. cit.*, pp. 266-67.

(5) ICM, pp. 318-25.

(6) Block, *op. cit.*, p. 266.

(7) ICM, pp. 189-90. なお、デイヴィスは感覚質の内観的可知性に依拠してシューメーカーの感覚質欠如不可能論を擁護しているが、残念ながら必ずしも内観的観点で一貫しておらず、観点にぶれがあるようにみえる。Cf. Lawrence H. Davis, "Functionalism and Absent Qualia," *Philosophical Studies*, 41(1982).

(8) Conee, *op. cit.*, pp. 354-56.

(9) *Ibid.*, p. 358.

(10) *Ibid.*, pp. 358-59.

(11) ICM, p. 189.

(12) Conee, *op. cit.*, p. 348.

(13) ホワイトは、何かある感覚質をもつという一般的性質は、痛みをもつとか痒みをもつとかの個別的性質と違って、感覚質とはみなせないと主張する。Cf. Nicholas P. White, "Prof. Shoemaker and So-called 'Qualia' of Experience," *Philosophical Studies*, 47 (1985).

(14) シューメーカーは異なる人のあいだの感覚質の逆転を間主観的 (intersubjective) 逆転とよび、また同一人物における通時的な逆転を内主観的 (intrasubjective) 逆転とよんで、前者の間主観的逆転が探知不可能な仮説にとどまるとしても、そのような想定が無意味ではないのは後者の内主観的逆転が探知可能だからであると言う (ICM, 196-97)。

(15) 同じ言語的表象に基づく信念が同じ内容をもつかどうかという問題は、信念内容の環境非依存性 vs 環境依存性、狭い内容 vs 広い内容、狭い機能主義 vs 広い機能主義、外在主義 vs 内在主義などの名称のもとで最近活発に行われている論争と深い関係があると思われる。

(のぶはら・ゆきひろ 筑波大学哲学・思想学系助教授)